

## 奥西一夫・亀田弘行両教授の御退官によせて

奥西一夫先生は平成 14 年 3 月 31 日をもって京都大学を定年退官され、亀田弘行先生は同日をもって辞職されました。両先生には長年にわたり研究・教育のみならず災害軽減のための社会的活動を通して京都大学防災研究所の発展に多大のご尽力をいただきました。ここに両先生のご功勞の一端をご紹介します。所員一同心から感謝の意を表したいと思います。

奥西一夫先生は昭和 36 年京都大学理学部地球物理学科を卒業後、同年 4 月に京都大学大学院理学研究科修士課程地球物理学専攻に進学し、昭和 37 年 3 月に退学されました。同年 4 月京都大学防災研究所助手に採用されたのち、同 50 年 5 月助教授に昇任、平成 2 年 2 月教授になられ、以来定年を迎えるまで防災研究所において研究と教育にあたってこられました。平成 14 年 4 月をもって京都大学名誉教授とられました。

この間、先生は昭和 37 年 4 月から昭和 38 年 3 月までは地すべり研究部門、昭和 38 年 4 月から平成 8 年 4 月までは地形土じょう災害研究部門で助手、助教授および教授として、防災研究所の改組により平成 8 年 5 月からは地盤災害研究部門傾斜地保全研究分野の教授として、生活圏に近接した急傾斜地の災害について研究を推進してこられました。

研究面において、先生は、水文地形的相互作用の解明に力を注ぎ、地形変化過程と斜面における陸水循環との相互作用の結果として、斜面の不安定化の発生を説明し、それに基づいて表面侵食、表面崩壊、および岩盤滑りをともなう深い斜面崩壊を主体とする地形変化プロセスのうち、どのモードのものが起こっているかを区別する方法を提案し、斜面災害における危険度予測の方法論の一分野を確立されました。このような研究方法は地形学および陸水物理学の分野に新しい発展をもたらすものとして注目され、平成 4 年に横浜で行われた国際水文学協会・国際気象学大気物理学協会共催の学術大会で、水文地形的学的方法論に関するシンポジウムのコンピーナーを務めるなど、国際的にも高い評価を得ておられます。

また、平成 13 年に東京で開催された国際地形学連盟の学術大会では水文地形学関連のセッションとシンポジウムが合わせて 3 つ開催されましたが、そのうちの 2 つのコンピーナーを務められ、水文地形学分野で国際的に指導的役割を果たしてこられました。さらに水文地形学の専門家として、地形学の国際学術誌「Zeitschrift für Geomorphologie」の外部編集委員を務めておられます。先生は、上記のような地形学や陸水物理学に関する基礎研究のみならず、斜面災害の差し迫った危険度を察知し、安全な避難と二次災害防止のための斜面のモニタリングなどの応用研究を行い、政府機関、地方公共団体および住民団体と連携してそれらの研究成果の普及にも力を注いでこられました。特に最近では NPO 組織である国土問題研究会の理事長として、国土の安全な利用のための学際的な研究活動の成果を実社会に活かすための活動を積極的に行っておられます。

教育面においては、理学部地球物理学科や大学院理学研究科地球惑星科学専攻の授業を担当すると共に、研究室でも多くの学生の研究指導をおこない、卒業生たちはいま研究者、教育者や技術者として社会的に活躍されておられます。また国外、国内から研修員、研究生、研究員を積極的に受け入れて人材育成に努力され、彼らがそれぞれの持ち場に帰って後も研究活動の支援を続けてこられました。

学会活動としては、日本陸水学会、日本水文学会、陸水物理研究会、日本地形学連合、砂防学会、日本地すべり学会、日本自然災害学会、日本科学者会議、および国際水文学連盟に参加され、学会長、運営委員、編

集委員、データベース主幹、監事などの役職を通じて、災害科学に関連する理工学分野の研究振興に尽くしてこられました。

亀田弘行先生は、昭和38年3月京都大学工学部土木工学科を卒業、同年4月に京都大学大学院工学研究科修士課程土木工学専攻に入学、昭和40年3月同課程を修了後、同年4月、同博士課程に進学、昭和43年3月、同課程を単位修得退学されました。同年4月、京都大学工学部助教授に採用され、昭和61年10月、京都大学防災研究所附属都市施設耐震システム研究センター教授に昇任され、平成8年5月の防災研究所の改組後は、同総合防災研究部門教授として今日に至るまで総合防災に関する研究・教育で主導的役割を果たしてこられました。また、平成10年1月から、理化学研究所地震防災フロンティア研究センター・センター長を兼任し、同研究センターが平成13年4月に理化学研究所から独立行政法人防災科学技術研究所に移管されて以降は、同センター長を併任され、平成14年3月に京都大学を退職後も引き続き同センター長を勤められています。その間、イリノイ大学、コロンビア大学の客員研究員、インスブルック大学の客員教授などに招かれ、国際的に幅広い活動を行ってこられました。

先生は、地震工学、ライフライン防災工学、防災情報論の研究を行うとともに、特に都市地震災害の防御・軽減の研究において、理工学と社会科学にまたがる多分野間の共同研究が大切であるとの認識により、学際的な総合防災の研究推進に尽力されています。昭和61年から10年間にわたる防災研究所附属都市施設耐震システム研究センター主任としての活動、平成8年5月の防災研究所改組により設置された総合防災研究部門の運営はその中心をなすものといえると思います。特に、平成7年1月に発生した阪神・淡路大震災以降は、防災研究における物理的課題・社会的課題・情報課題を横断する共同研究の推進に努力されました。

上記の地震防災フロンティア研究センターの運営、科学研究費特定領域研究「日米共同研究による都市地震災害の軽減」（平成11年度～15年度）の領域代表、科学技術振興調整費多国間共同研究「アジア・太平洋地域に適した地震・津波災害軽減技術の開発とその体系化に関する研究」（平成11年度～15年度）の研究代表者としての活動は、総合防災研究推進の一環をなすもので、それらは、従来の個別専門領域の研究の狭間で多くの被害が発生した震災の教訓を生かすとともに、これを国際的な場に展開しようとするものです。

研究面の業績は、橋梁等の社会基盤施設の地震応答解析と耐震設計、設計地震荷重評価のための地震危険度解析、ライフラインシステムの地震時性能評価、防災情報処理システムの構築など、多岐にわたっております。それらは、構造工学的解析手法、不確定性評価のための確率論、ネットワーク信頼性理論、防災情報処理のための時空間GISなどのしっかりした基礎的理論に基づき、新しい応用分野として開発されたものです。その中から、地震動の非定常スペクトル理論、確率論的想定地震、ライフラインシステムの地震時相互連関モデル、橋梁一車両連成系による橋梁の地震時挙動の解明、被災ライフラインの最速復旧戦略アルゴリズム、条件付確率場の理論、リスク対応型地域管理情報システムなど、極めて独創的な概念に基づく研究成果を挙げられています。これらは、地震災害の現場で実際に発生する諸現象を基本的動機とし、それらを普遍的・一般的に理解し、防災対策に結びつける方法論を編み出したものであり、これらの成果に対して、土木学会論文賞、交通図書賞、国際構造物の安全性・信頼性学会賞が授与されています。

教育面では、工学部地球系学科、大学院工学研究科土木系専攻の講義を担当するとともに、平成10年度に開設された大学院情報学研究所社会情報学専攻に参加して、情報化時代における防災研究・教育の新たな展開

を切り開くことに貢献されました。先生の研究室はこれら種々の研究科の学生が集まり、異なる分野の研究とその背景となる分化を相互理解する場となり、それにより社会の多方面で活躍する多数の高度な技術者・研究者を輩出されました。

この他、土木学会、地域安全学会、国際構造物の安全性・信頼性学会など、多くの学会において主要な役割を果たすとともに、旧建設省・科学技術庁・国土庁、また内閣府・文部科学省などの専門委員会、京都府・大阪府・兵庫県や各種協会などにおける専門委員会の主査・委員等を務めて、社会的に多くの貢献をされています。

防災研究所は、平成8年度に5研究部門・5研究センターへの改組ならびに全国大学の共同利用研究所への移行、平成9年度には災害科学の卓越した研究拠点（COE）に認定され、目覚ましい発展を遂げてきました。平成14年1月に発表された「遠山プラン」でこれまでの「COE」制度はなくなりましたが、防災研究所はひきつづき「防災学」の世界的教育研究拠点としての役割を果たしていこうとしております。

大学の行っている教育・研究に対して厳しい世論が存在し、大学の研究の質的充実や国民に対する説明などの取り組みを支援・促進する方策として平成12年大学評価機関が発足し、大学の研究・教育評価の試行がすでに開始されています。さらに、平成13年度には国立研究機関の独立行政法人化が実施され、国立大学についても平成16年度法人化に向けての準備がすすめられています。

このように重要な時期に、深い学識と豊かな経験をお持ちの両先生が退官されますことは防災研究所にとりまして大きな痛手であり、誠に残念でございますが、残された所員一同は防災研究所の発展のためさらに奮励努力することにより両先生のご労苦に報いたいと思っております。

最後に、奥西一夫先生、亀田弘行先生のご健康とご多幸をお祈り申し上げますとともに新たな環境でのご活躍をご期待申し上げます。

平成14年7月

京都大学防災研究所長

入 倉 孝 次 郎